



Newspaper in Education

鹿児島NIE便り

2017年(平成29年)1月号(通巻 第99号)

発行:鹿児島県NIE研究会

NIE(エヌ・アイ・イー)は、教育界と新聞界がお互いに手を携え、新聞を教育の現場で積極的に活用していこうとする活動です。関心のある先生方の参加をお待ちしております。研究会には教職員はもちろん関心のある方ならどなたでも参加できます。お気軽にご参加ください。

事務局:鹿児島与次郎1丁目9番33号(南日本新聞NIE事務局内) Tel 099 (813) 5168

愛媛で日本NIE学会

シンポ「主権者育成とNIEの検証」



参院選の前に「関心のなかった政治について調べたという佐伯さんは「選挙権年齢の引き下げで多くの高校生が学びのチャンスを得た」と報告。その上で「社会に高

松山東高校(愛媛県)3年の佐伯姫夏さんと明賀優介さんは、選挙権年齢引き下げで新たに選挙権を得た立場で登壇。7月の参院選で一票を投じた経験を踏まえて話した。

シンポジウム「主権者育成とNIEの検証」では、NIEを実践する教師や高校生、報道関係者がそれぞれの活動を報告し議論を交わした。

新聞使い政治に関心を行動する力の育成必要



い関心を持つ若者を育てるには、学校で政治や選挙を学ぶ機会を増やす必要がある」と述べた。

明賀さんは「投票の質を高めることが重要だ」と強調。そのため「(全体の)投票率は30%になれば現行選挙制度には日々変化する情報を整理、理解し、政治の現状と背景を正確に把握し、そこから日本の未来を考えるべきだ」と訴えた。

18歳選挙権導入を前に多くの高校などで出前授業や模擬投票など主権者教育が行われた。参院選投票率は18歳51・28%、19歳42・30%。総務省抽出調査で18歳投票率は20代、30代のいずれの年齢の投票率よりも高かったが、全世代を合わせた平均は下回った。

学会顧問の小原友行氏(広島大学大学院教授)は20代投票率が1960年代と比べ半減していることを通し、社会に強い関心を持ち、その社会をより良くしていく意欲、行動する力を育てなければならぬ」と締めくくった。

11月26日、松山市の愛媛大学

日本N I E学会第13回愛媛大会が11月26、27の両日、松山市の愛媛大学であった。テーマは「N I Eが主権者育成に果たす役割」。大学の研究者や教育関係者、新聞関係者ら約250人が全国から集まり、

自由研究発表や意見交換した。18歳選挙権導入を受け、シンポジウムでは地元の高校生も登壇、主権者教育などについて考えを述べた。

(中原克巳、有馬知洋)

実践例挙げ意見交換 研究分科会

研究分科会は26日、四つのテーマに分かれて開かれた。研究者や教員が、実践例を挙げながら、表現力や発信力を養うなどのN I Eの効果や課題について発表し、意見を交わした。

「新聞社とつくるN I E」分科会では、愛媛県西条市立庄内小学校の日野和子教諭と愛媛新聞社読者事業部長の大植美香氏が「新聞づくりで高める言葉の力」と題し、教師と新聞社が連携した授業の試みを紹介した。連携授業は小学4年生国語で実施。新聞社員から新聞記事の書き方、見出しの付け方など指導を受け、学級新聞を仕上げるまで計8時間の授業に取り組んだ。



実践例を基にN I Eの意義を考えた分科会。11月26日、松山市の愛媛大学

「N I Eとアクティブラーニング」分科会では、花園大学の中善則教授が、大阪府岸和田市立野村中学校の生徒たちが「新聞社」づくりに取り組んだ実践例を報告した。同校の生徒たちは、地域の課題を探し、住民や行政に取材して新聞を発行。自分たちで開拓した読者に新聞を届けた。中教授は「自分で調べ、発信し、深め合うアクティブラーニングが、N I Eでは自然とできる」と話した。

教員自身が新聞作りに取り組むことで、効果的な指導ができる。学会最終日の27日に開かれた自由研究発表で、鹿児島大学の研究グループが、指導力向上を目指して新聞制作のノウハウを学ぶ教員研修プログラムの開発の実践成果を報告した。

効果的な指導へ 教員が新聞作り

受講者は、学校生活などからテーマを探して取材する「テーマ新聞」、社会の授業で学んだ内容をまとめる「社会科学習新聞」、文章を説明文やコラムに書き分けることに主眼を置いた「国語科学習新聞」の3タイプに分かれて制作に取り組んだ。

11月の講習では、完成した新聞を記者が評価して、改善点を指導。さらに、各受講者が授業で児童生徒に作らせた新聞を提示し、どのように作らせたのか、指導内容を報告した。

満口教授は「教師自身が新聞作りの難しさを経験することで、児童生徒への具体的な指導法に生かされた」と分析。このほか、N I Eの効果をも再認識できた点などを成果に挙げた。

一方で課題となったのは、受講生によって新聞作りの授業の経験や習熟度に差があったこと。「経験に合わせた講習など、プログラムを見直し、いくつか必要がある」としている。

このほか、教師が新聞の内容を重視するのに対し、児童は紙面の見た目に着目する「評価のずれ」を指摘。評価基準を共有する必要性も提言した。

研修を開発・実践 鹿大が成果発表



教員向けの新聞制作講習の成果を発表する鹿児島大学の研究グループ

＝11月27日、松山市の愛媛大学

新聞読み 視野広げ 社会考えて

多様な考え方に触れ、自分なりの意見を持ってほしい。鹿児島大学の渡邊弘准教授(48)＝憲法学＝は、新聞を活用した対話型授業に取り組んでいる。毎回、学生が選んだ記事をテーマに意見を交わす。自分とは異なる視点の意見に刺激を受けたり、普段から新聞に目を通すようになったり、社会について考えるきっかけになっているようだ。

鹿大・渡邊准教授 学生が記事選択、対話型授業

五輪の費用問題を取り上げた記事を紹介する学生。新聞を広げながら発表を聞く学生もいる
鹿児島市の鹿児島大学



昨年12月下旬の共通教養科目の「日本国憲法」。農学部1年の元石岳さん(20)は「五輪費用 精度あやふや」と国「負担綱引き」の見出しで、招致時の2倍以上に費用が膨らんだ問題を取り上げた全国紙の記事を取り上げた。「もう4年後なのに大丈夫か」と心配になったという。費用負担のあり方などを問

題提起した。ほかの学生からは、「ここまで費用を掛けて開催する意味があるのか」「招致時の」見積もりが甘かったのでは」「費用の問題は誰に責任があると思えますか」などの意見や質問が相次いだ。

授業は1年生を中心に約90人が受講。希望者や当日指名された学生が気になった記事について紹介するようになっており、新聞を購入していない学生はその日の新聞をコンビニで買うなどして読んでくることになっている。授業ではこのほか、性的少数者や子どもの貧困について、新聞記事などを参考に3〜6人のグループで意見を集約し、発表する時間も設けている。

新聞を購読している親戚の家に住んでいる理学部1年の内彩乃さん(19)は、授業をきっかけに普段から新聞を読むようになったという。教員志望で、「子どもの貧困などの現実が見えてきた。授業ではいろいろな視点を知ることができ、考え方の幅が広がった」と話す。渡邊准教授は、昨年3月まで教壇に立っていた活水女子大学(長崎市)でも新聞を積極的に活用した授業に取り組んできた。「新聞は幅広い分野の内容があり、気になる記事を読んで考えることで、自分の意見を持つ習慣が身に付く。社会の出来事を通して、主権者として日本国憲法のある方についても考える社会人になってほしい」と話した。

(右田雄二)

新聞投稿 全員達成

南九州・青戸小5年生13人

転校の2人と教諭も掲載



全員の掲載達成を喜ぶ青戸小学校5年生
三南九州市穎娃

南九州市穎娃の青戸小学校5年生13人が、南日本新聞の投稿欄への全員掲載を達成した。掲載されたのは、ひろば欄「若い目」の作文とイラスト、地域総合面「子供のうた」の3コーナー。投稿への返事も届き、喜んでい

る。投稿は児童が4年生のとき、担任の草野利雄教諭(49)が表現力の育成と思いつくりに取り組みを始めた。4年時は15人中6人が掲載。草野教諭が引き続き担任する本年度は目標を「全員掲載」に定め、週1回は新聞記事の感想を書くなどして表現力を磨いてきた。児童は、書きたいコーナーを選んで投稿。昨年8月19日の若い目を皮切りに、12月26日に若い目とイラストが同時に載って、13人全員掲載を達成した。転校した2人は4年時に載り、草野教諭も昨年8月に「ひろば」に掲載されており、「全員」の快挙と喜ぶ。

14年越しの日本縦断を果たした記事の感想を書いた松元涼馬君の投稿には、記事の男性からお礼のがきが届いた。松元君は「みんなが読んでくれていてと分かってうれしかった」と感謝し、大根やぐらのイラストが掲載された寶代七星さんは「家族も喜んでくれた。次は作文で載りたい」と意欲を見せる。草野教諭は「書くことに積極的になつてきた。子どもたちの達成感と自信につながる」と話した。

(上飯屋美佳)

南日本新聞 2017年1月24日

本紙の「若い目」「子供のうた」

南日本新聞の「若い目」「子供のうた」欄に作品が採用された種子島の児童・生徒に、励ましのはがきを10年近く送り続けている人がいる。元小学校教諭で、中種子町教育長も務めた羽生昌弘さん(82)＝同町油久。23日、南種子町島間小学校の児童代表らが羽生さん方を訪ね、お礼の手紙を手渡した。

元中種子町教育長の羽生さん



採用児童らに激励手紙10年

はがきを書き始めたのは、教育長退任後の2007年5月から。自分が小学4年生の時に町の作文コンクールで入賞して広報誌に載り、周囲から褒められてうれしかった体験を思い出したのがきっかけだった。

羽生さんは国語が専門。校長時代は南日本作文コンクールの審査員を担当した。子供たちに書くことを好きになつてほしい。少しでも動機を。羽生さんは「わざわざ来てもらって恐縮。今後も続けたい」と意欲を見せた。

(山本輝志)

新聞配達員にカイロ

鹿屋・星野さん 贈呈10年



鹿屋市打馬一丁目の自営、星野和雄さん(65)は、毎年元旦に自宅に南日本新聞を配る

鹿屋第一営業所の配達員に使い切りカイロを贈っている。「寒い中で配達は大変だろ

使い切りカイロを贈った星野和雄さん(左)と川崎勇二所長
＝鹿屋市寿一丁目
う」との気遣いで、約10年前から続けている。同営業所の前身・第一販売所の所長を、友人の山下淳一さんが務めていた縁で始めた。自宅のポストに大みそかの晩、「苦勞さん」と手書きのメモを添えた使い切りカイロ数十枚を、ビニール袋に入

(福盛三南美)

南日本新聞
2016年12月27日

南日本新聞
2017年1月24日